

中国人大学生における強迫傾向と親の養育態度

李 暁 茹

東京大学大学院教育学研究科

下 山 晴 彦

東京大学大学院教育学研究科

本研究は、中国人大学生を対象に、強迫傾向尺度を作成し、その得点と親の養育態度尺度との関連性を検討した。研究Ⅰでは、230名の大学生・大学院生に、予備調査で作成した60項目の強迫傾向質問紙に回答を求めた。因子分析により、「疑惑・制御」、「確認」、「正確」、「優柔不断」、「洗淨」という5つの下位尺度、合計49項目からなる、強迫傾向尺度を作成した。また、十分な信頼性（内的整合性・再テスト信頼性）と妥当性（因子的妥当性・基準関連妥当性）が確認できた。研究Ⅱでは、重回帰分析を用いて、下位尺度を中心に、強迫傾向と親の養育態度との関連を検討した。その結果、男性においては、「強迫傾向」及びその3つの下位尺度「正確」、「確認」、「疑惑・制御」と親の養育態度の間に有意な相関が見られた。一方、女性においては、「優柔不断」「洗淨」という男性とは違う側面において、親の養育態度との間に有意な相関が見られた。

キーワード：強迫傾向、親の養育態度、強迫傾向尺度、中国人大学生

問題と目的

強迫性障害 (Obsessive-Compulsive Disorder: OCD) は、よく見られる不安障害の1つであり、強迫観念と強迫行為という2種の症状からなる。近年、生物学的研究や薬物療法の進歩により、OCDの発症は脳機能障害によるという考え方が注目されている。一方、認知行動療法、特に暴露-反応妨害法の治療効果も見出されている。こうした認知行動療法の一定の効果は、器質的な要因のみならず、心理的な要因が発症に関与することを示唆している。心理的要因の把握・理解は、患者の対人関係上に生じた問題を扱う際には不可欠なものであり、薬物療法や認知行動療法を適用する上で重要な役割を果たしている (白波瀬・藤澤, 2002)。

OCDについては、治療についても予防についても、心理学的要因の重要性が指摘されるようになってきており、特に予防との関連では、親の養

育態度がOCDの形成因として注目されている。古くは、辻・小林・清水・坂本 (1966) が、OCD患者には父親との温かい、良好な親子関係が見られなかったと報告している。また、母親との関係性に関しては、過保護、内的拘束が特徴として指摘されている。水野 (1989)、成田 (1982)、塩原 (1992) は、OCD児童の母親は過保護・過干渉で、共感性が乏しい養育態度があること、また父親については精神的不在性が見られることを報告している。

さらに、近年では、Parker, Tupling, & Brown (1979) の親の養育態度尺度 (Parental Bonding Instrument: PBI) を用いた調査研究が行われている。PBIは自己評価尺度で、PBI得点は両親の養育態度を養護 (care) 因子と干渉 (protection) 因子の2つの尺度で評価している。養護尺度は、「情緒的暖かさ」に関する養育行動を評価し、干渉尺度は、「厳格な統制」に関する養育行動を評価する。Hafner (1988) の研究では、OCD群の父親・母親

ともに健常群より干渉得点が高かった。Vogel, Stiles, & Nordahl (1997) や吉田 (1999), 吉田・多賀・福居 (2001) の研究では、健常群と比べ、OCD群の両親はともに養護得点が低く、干渉得点が高いと報告されている。特に、吉田他 (2001) の研究では、干渉の傾向は両親ともに顕著に高く、OCD患者においては、母親だけではなく、父親にも過干渉的な養育態度が認められた。吉田らはこの結果を受けて、従来重要視されてこなかった父親の支配・干渉的な養育態度が、OCDの発症要因を考える際に、重要な意味を持つことを指摘している。

以上の先行研究の知見を踏まえると、OCDについては、親の養育態度といった心理学的要因との関連が注目される。このような心理学的要因や心理現象には文化に特殊な側面があって、文化によりその特徴や発生メカニズムも異なることがある(岩脇, 1994)。こういう文化と心の相互影響のプロセスは、近年、文化心理学の名のもとに精力的に研究されてきている(Shweder, 1991)。OCDや養育態度はその国の歴史的背景や累積してきた習慣、国民性などと関わりがあると推察できる。しかし、これまで、OCDの発生や、形成に関する文化的影響に関する研究はほとんどなされていない。そこで、OCDに関する研究を今後さらに発展させるためには、文化差に注目することが必要となる。なお、中国では、近年一人っ子政策や大学、高校の低進学率の影響によって親の養育態度は、非常に特徴的な傾向を示すようになってきている。親の高い教育期待は、子供に対する養育態度を大きく左右しており、知育偏重や、自立した生活の経験の不足、道徳規範に対する意識の低下(新保, 1992)以外にも、子供への理解不足、過保護、学習面における厳しさという問題にも影響している。従って、中国における親の養育態度と強迫傾向との関連性を研究することによって、OCDの発生や形成について考察を深められるのではないかと考えられる。さらに、その知見と米国や日本など、

他国で得られている知見を比較することで、文化差の影響、ひいては心理学的要因がOCDの発生や形成に及ぼす影響を明らかにすることが期待できる。

以上は、病的な強迫状態、即ち強迫症状について論じてきた。しかし、強迫的な思考や行動は、単に病的な症状だけでなく、健常者にもそれと似たような心理的傾向が認められている(Rachman & de Silva, 1978; Salkovskis & Harrison, 1984)。こうした健常者に認められる強迫的な状態は、「強迫傾向」と呼ばれている。この強迫傾向は、OCD患者の強迫症状と質的に同じものであるが、頻度、強度、苦痛度などが軽いとされる(丹野, 1998)。しかし、軽度であるとはいえ、そこにはOCD固有の心理的苦痛が見られる。さらに、強迫傾向が悪い方向へ進むとOCDの発症につながるとの指摘もある(Salzman, 1973)。強迫傾向と強迫症状は同次元上のものであるということを考えると、健常者の強迫傾向への着目は、OCDの予防を考える上で極めて重要といえる。そこで、本研究では、OCDの発生や形成に関する国際比較研究の出発点として、健常者が体験する強迫傾向に焦点を当て、中国人大学生の強迫傾向と親の養育態度との関連性を研究することを目的とする。大学生を研究対象にするのは、OCDの発症は大学生を代表とする青年期に多く、中国でも大学生のOCDが問題視されてきているからである。また、大学生はさまざまなストレスを経験しやすく、そのストレスは強迫傾向を悪化する可能性が高いと考えられる。さらに、本研究の質問紙に答えるためには、ある程度の認知能力と客観的な判断力が要求されるからである。

OCDの発症の病因は様々であり、心理学的要因、生物学的要因、環境要因、社会文化的状況などの諸要因が関与している(吉田, 1999; 松永, 2002)。しかし、社会環境や文化背景といった要因は、介入がほぼ不可能だと考えられる。また、疾患を治療するより、病気になる前の予防を重視

する点において、本研究では、幼少期の家族環境及びその時の親の養育態度に注目する。父親と母親の養育態度の間には高い相関関係があると思われる、本研究で用いる重回帰分析を行う際に、多重共線性が起こる可能性が高いと予測されるため、両親の養育態度の影響を別々に検討することにする。

また、本研究では、さらに男女別々の分析を行う。これには2つの理由がある。まず、強迫症状には男女差が見られるからである。OCDは一般的には男性の方が女性より発症年齢が低く、ドアやガス栓を長時間にチェックするなどのような「確認強迫」がよく見られるのに対して、女性は手や体を何度も洗うなどのような「洗浄強迫」を伴うことが多いとされる。発症契機についても男性、女性それぞれ特徴があり、男性では学業成績、進学での競争、仕事上の挫折、過労などに関連しているのに対して、女性ではそれ以外も異性関係、結婚、妊娠、出産、育児、家庭内の葛藤などが大きな意味を持っているとされている(成田, 1994)。次に、このようなOCDの発症年齢、発症契機に加え、中国では子供に対する親の期待に男女差が予想されるからである。「跡継ぎ」意識がその要因の一つである。儒教文化の影響で、今の中国特に農村部では、家は男性の子孫によって継承されるべきだという観念がまだ強く残っている。また、老後保障制度が整備されていないため、老後の世話を息子に依存する意識や、男性優位な社会環境も男子と女子に対する親の期待を左右していると思われる。

一方、強迫傾向と養育態度の関連を検討する際、強迫傾向尺度が必要となる。しかし、中国ではOCDのアセスメント技法に関する研究は少なく、強迫症状を測定するための適切な尺度がまだ見当たらない。既に作成されている尺度の代表的なものとしては、Hodgson & Rachman (1977) のモーズレイ強迫神経症検査 (Maudsley Obsessional-Compulsive Inventory: MOCI), Sanavio (1988) の

Padua 検査 (Padua Inventory: PI), Goodman (1989) の Yale-Brown 強迫性尺度 (Yale-Brown Obsessive Compulsive Scale: YBOCS) が挙げられる。しかし、いずれの尺度にも共通する問題点として、次の3点が挙げられる。①これまでの研究より「優柔不断」がOCDの中心的症状とされているにもかかわらず (Reed, 1976; Ferrari & McCown, 1994), これらの尺度には「優柔不断」に関する項目が入っていない。②いずれも臨床群を対象に作られた尺度であるため、強迫的観念や行動の頻度、強度、苦痛度などが患者より軽い健常群の強迫傾向を測定する尺度としては、その識別力が落ちる可能性がある。③これまでの尺度は欧米人を対象に作られた尺度であるにもかかわらず、中国の社会システムや文化的背景の実情に基づいた標準化がなされていない。従って、中国における強迫傾向と養育態度の関連を詳細に検討するためには、高い妥当性と信頼性を備えた尺度の開発が必要不可欠である。

そこで、本研究の具体的な目的としては、第一に強迫傾向尺度を開発することとする(研究1)。その際、信頼性と妥当性の検証を行う。基準関連妥当性については自己評価式抑うつ性尺度 (SDS) と状態・特性不安尺度 (STAI) との関連性を検討する。SDS と STAI は、強迫傾向尺度及びその下位尺度との間に中程度の正の相関が予想される。また、抑うつと強迫との関連性は多くの研究に指摘されている (Salkovskis & Harrison, 1984) が、さらに同一の上位カテゴリー、不安障害に属する構成概念を測定する尺度として、STAI と強迫傾向尺度との相関がより強いと考えられる。第二の目的として、強迫傾向と親の養育態度との関連について検討する(研究2)。本研究で新たに作成した強迫傾向尺度と、養育態度をより多面的に検討できる養育態度尺度 EMBU を用いて検討する。先行研究では、親の養育態度は強迫症状に影響していること、そしてOCD患者の親には「低・養護 (care)-高・干渉 (protection)」という特徴が見られることが指摘されている (Vogel et al., 1997; 吉田,

1999; 吉田他, 2001)。しかし, 強迫症状と一言で言っても, いくつかの下位尺度を含んでおり, その症状によって発症の契機や維持のメカニズムが異なる。また, 親の養育態度は多様な側面を有し, 「養護 (care)」と「干渉 (protection)」の2つの側面だけでは概括することができない。別の尺度との関連を見る必要がある。そこで, 本研究では, 両者の関連をさまざまな観点から検討するために, Perris, Jacobsson, Lindstroem, von Knorring, & Perris, (1980) の養育態度尺度 *Egma Minnen av Bardndosnauppförstran: EMBU* を用いることにする。EMBU は, 両親の養育態度と養育行為を幅広く測定できる尺度であり, 特に神経症患者の両親の養育態度に関する研究において多く使用されている。また, 本研究では, 尺度の総合得点だけでなく, 下位尺度間の関連を検討し, 親の養育態度が強迫傾向に与える影響を多面的に明らかにすることを試みる。

強迫傾向尺度の作成 (研究 1)

予備調査 1

目的 強迫傾向を示す健常者の思考, 感情, 行動などについての情報を広く集め, 得られた記述を参考にして, 中国人の強迫傾向を測定する尺度を構成する。

方法 中国上海市の大学生・大学院生 50 名 (男性 23 名, 女性 26 名, 不明 1 名, $M=23.3$ 歳, $SD=2.3$) に対して, 個別に自由記述式質問紙調査への協力を求めた。予備的に作成した自由記述式質問用紙を, 教育心理学専攻の日本人大学院生の意見を参考に修正した。さらに在日中国人留学生 (6 人) に実際に回答を依頼し, 改良した質問紙を用いて 2003 年 6 月中旬から 7 月上旬にかけて, 中国で調査を実施した。

質問紙の形式として, 大きく Part 1 と Part 2 に分け, 強迫観念と強迫行為それぞれに関して, 今までの経験について自由記述式で回答を求めた。具体的に, 「Part 1」では, ①「不愉快な考えや衝

動にとらわれ, それからなかなか離れられない」②「物事を決めるのは困難に感じる, 実行する時に長い時間がかかる」という体験があるか, それはどんな時, どのような状況であったか, 考えた内容はどのようなことであったか, その時, どのように感じたり, 考えたりしたか, ③「①, ②のようなことをもたらした不快感に対し, どのような対処をしたか」という順で尋ねた。「Part 2」では, ①「ある行動を何度もしてしまう」②「ある行動や物の並べ方を自分の納得できる順序・規則に従ってやらないと気がすまない」③「何らかの理由のため行動する。しかしその行動とその理由は現実的に無関係だと感じる」というようなことを体験したことがあるか, そして, それはどんな時, どのような状況であったか, どのような行動であったか, そのようにした時, どのように感じたり, 考えたりしたか, という順で回答と求めた。

結果と考察 答えてもらった記述のうち, 質問の趣旨にそぐわない記述を除外し, 残りの記述に対して, 川喜田 (1967) の KJ 法による分類を行った。分類は, 基本的に筆者自身が行った。客観性を高めるため, 分類過程と分類結果について, 筆者以外の教育心理学専攻の大学院生の意見を参考にした。その結果, 「思考のコントロール」, 「衝動」, 「疑惑」, 「優柔不断観念」, 「完全主義」, 「対処方略」, 「洗浄行動」, 「汚染」, 「確認」, 「順序」, 「整理整頓」, 「優柔不断行為」, 「儀式」, 「数字」, 「数える」の 15 個のカテゴリーが生成された。このようなカテゴリーに基づき, 質問紙「強迫傾向尺度」の質問項目として 78 項目を作成した。

また, 自由記述文を分析すると, Rachman & de Silva (1978) の研究と一致しており, 強迫症状と似たような強迫傾向が健常者の中でも多くみられることが示唆された。また, 中国人大学生における強迫傾向の特徴として, まず, 今回の調査では, 試験や進学, 進路に関する強迫的な思考・行動にかかわる記述が多く得られた。これは中国の大学,

高校の低進学率や、就職状況の厳しさに直接関連していると考えられ、また、親たちの高い教育期待や勉強面に対する厳しいしつけの影響も受けていると思われる。

予備調査 2

目的 質問紙調査を実施し、強迫傾向の尺度を作成する。

方法 上記の自由記述式質問紙の結果に基づいて作成した強迫傾向尺度を、2003年8月に中国の河北・北京の2つの大学の大学生・大学院生210名に対して一斉に実施した。すべての質問項目について、被調査者の最近1ヶ月の思考や行動について回答を依頼し、1（あてはまらない）、2（ややあてはまらない）、3（どちらともいえない）、4（ややあてはまる）、5（あてはまる）の5件法を採用した。その内、有効回答207人（男性115名、女性82名、不明10名、 $M=22.6$ 歳、 $SD=2.8$ ）について分析を行った。

結果 全118項目の評定値の分布を検討し、分布の偏りの著しい項目を確認して、平均値が4.5以上または1.5以下となった強迫傾向の2項目を削除した。強迫傾向の76項目に対して因子分析を行い、推定法は最小二乗法で、プロマックス回転を施した。因子数は固有値の変化の仕方と、実際の解釈しやすさから総合的に決定し、5因子解が適切と判断した。5因子解はデータ行列の全分散の71.1%を説明していた。第1因子（17項目、 $\alpha=.87$ ）には、不確実感、疑いやすさや認知的コントロールの困難さということを記述した質問項目が集まっているため、「疑惑・制御」と名付けた。第2因子（13項目、 $\alpha=.85$ ）には、ドアやガス栓などを何回もチェックする確認行動を意味する質問項目が集まっているため、「確認」と名付けた。第3因子（8項目、 $\alpha=.81$ ）には、理由もなく整理整頓や順序、対称性へのこだわりを記述した質問項目が集まっているため、「正確」と名付けた。第4因子（9項目、 $\alpha=.74$ ）には、物事を決める時の困難さや優柔不断を記述した質問項

目が集まっているため、「優柔不断」と名付けた。第5因子（5項目、 $\alpha=.65$ ）には、汚れに気になることや清潔にすることにこだわる洗浄行為を表す質問項目が集まっているため、「洗浄」と名付けた。5つの因子のうち、「優柔不断」と「疑惑・制御」は認知的な側面、強迫観念に関する因子で、「確認」、「洗浄」、「正確」は行動的な側面、強迫行為に関する因子である。それぞれの項目で下位尺度を構成した。

さらに項目分析を行い、因子負荷と共通性が低い項目、具体的な内容が欠けており理解しにくい項目、及び複数の解釈の可能性がある項目の計24項目を除去した。また、他の因子と比べ、 α 係数があまり高くない洗浄因子が存在したが、それは、項目数が少ないことが理由であると考えられた。そこで「洗浄」に関する7項目と「優柔不断」に関する1項目、合計8項目を追加した。以上の手続きにより、本調査の質問紙を生成した。

本調査

目的 予備調査で改良した質問紙を実施し、尺度の信頼性と妥当性を検討する。

方法 予備調査を経て改良された60項目の強迫傾向尺度を用いて、2003年9月～10月に中国の河北・北京・大連・上海の4つの大学の大学生・大学院生230名に対し、調査を集団実施した。基準関連妥当性を検討するため、併せて自己評価式抑うつ性尺度中国語版（SDS：20項目）（舒，1999）と状態・特性不安尺度中国語版（STAI：20項目）（郑・舒・赵，1993）も実施した。SDSとSTAIは4件法であった。有効回答209人（男性60名、女性138名、不明11名、 $M=21.0$ 歳、 $SD=2.3$ ）について分析を行った。また、162名には再検査信頼性を検討するため、3週間の間隔をおいて再度実施した。

結果と考察 強迫傾向尺度60項目の評定値の分布を検討し、極端に偏っている項目は見られなかったため、すべての項目を分析の対象とした。60項目に対して予備調査と同じ5因子解を想定し

て、因子分析（最小二乗法，プロマックス回転）を行った。プロマックス回転後の各項目の因子負荷量を補足資料1に示す。因子間相関は、Table 1に示す。

信頼性検討の結果は、Table 2に示す。強迫傾向尺度及び下位尺度の α 係数は.79以上であり、高い内的整合性が示された。また、再検査信頼性について、強迫傾向尺度は.85であり、下位尺度は.71~.84の高い信頼性を示す値が得られた。基準関連妥当性の結果は、Table 2に示す。SDSとSTAIは、強迫傾向尺度との間に、予測どおり正の中程度の相関が得られた。いずれもSDSよりSTAIとの間により高い相関関係を示した。本研究で得られた相関係数の大きさの順序は理論的な枠組みと一致した。このように相関の方向だけでなく、大小関係についても強迫傾向尺度の基準関連妥当性が支持された。なお、「正確」・「洗淨」とSDSの間には有意な相関が見られなかったが、「確認」

とSDS、「正確」・「洗淨」とSTAIの間には弱い相関が得られた。これは、強迫、抑うつ及び一般の不安障害が異なる性質を持つと推察される。また、強迫傾向尺度の因子構造については、本研究では、5つの因子を抽出したが、「疑惑・制御」、「確認」、「洗淨」、「正確」の4因子が多くの先行研究によって確認された。また、「優柔不断」はOCD患者によく見られる症状であり、確認及び疑惑の症状と関連していることも指摘されている（井出・細羽，1995）。従って、この5因子構造は強迫傾向尺度の構成概念妥当性を支持する結果といえる。

このように研究1では、強迫傾向を測定・評価する尺度を作成し、その信頼性と妥当性を確認した。そこで、研究2では、研究1で作成した尺度を用いて、強迫傾向と親の養育態度との関連を検討する。

Table 1 強迫傾向尺度における因子間相関

	疑惑・制御	確認	正確	優柔不断	洗淨
強迫傾向(全体)	.68***	.71***	.59***	.60***	.61***
疑惑・制御		.25***	.19**	.50***	.24***
確認			.29***	.25***	.34***
正確				.05	.36***
優柔不断					.11
洗淨					

*** $p < .001$, ** $p < .01$

Table 2 強迫傾向各尺度の信頼性・基準関連妥当性

	Mean	SD	項目数	α 係数	再検査信頼性	抑うつ尺度	状態・特性不安尺度
強迫傾向(全体)	133.65	23.60	49	.89	.85	.35***	.52***
疑惑・制御	30.80	8.10	10	.79	.71	.34***	.47***
確認	33.33	9.67	12	.82	.84	.17*	.36***
正確	23.06	8.45	8	.87	.83	.12	.14*
優柔不断	24.15	8.20	9	.83	.76	.42***	.64***
洗淨	22.56	7.26	10	.79	.80	.08	.17*

N=230, 再テスト N=162

注. 抑うつ尺度と状態・特性不安尺度欄の数値は、基準関連妥当性を表している。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

強迫傾向と親の養育態度の関連（研究2）

目的

強迫傾向と親の養育態度の関連を下位尺度中心に検討する。

方法

研究1で作成した強迫傾向尺度（60項目）とEMBU (Perris et al., 1980) の中国語版（66項目）（岳, 1999）を用いて、2003年9月～10月に中国の河北・北京・大連・上海の4つの大学の大学生・大学院生230名に対して授業時間中に実施した。調査は強制的なものではなく、参加拒否の自由があることを被調査者に説明した上で行われた。中国語版養育態度尺度EMBU（岳, 1999）は、英語版に基づき、中国の臨床心理学者によって翻訳されたものである。その際、宗教のような文化の差異も考慮して、項目の調整や削除が行われていた。その結果、父親の養育態度は57項目、母親の養育態度は58項目から構成された（父親尺度、母親尺度の共通項目が49個あり、独自項目がそれぞれ8個、9個がある）。各項目に対して、1（めったにない）、2（たまにある）、3（時々ある）、4（いつもある）の4件法により評定する形式となっている。親の養育態度尺度は、被調査者が自分の子供の時に親から受けた養育態度を想起させ、父親、母親に対して別々に評価してもらう形である。

結果

有効回答192人（男性60名、女性121名、不明11名、 $M=21.0$ 歳、 $SD=2.3$ ）について分析を行った。統計解析はいずれもSAS8.2を用いた。

因子分析 各尺度の因子数は固有値の変化の仕方と、実際の解釈しやすさという2つの観点から総合的に決定した。その結果、強迫傾向尺度は研究1と一致して、5因子解が適切であると判断した。それぞれは「優柔不断」と「疑惑・制御」の認知的側面の因子、及び「確認」、「洗浄」、「正確」の行動的側面の因子である。

中国語版EMBUについては、今回の被調査者の大半は一人っ子であり、きょうだいがいることを前提とした「偏愛」に関する項目は答えられないため、これらを削除して探索的因子分析（最小二乗法、プロマックス回転）を行った。父親の養育態度に対する因子分析の結果は、3因子解が妥当であると判断し、それぞれ下位尺度を構成した。3因子解はデータ行列の全分散の63.2%を説明していた。具体的には、第1因子、懲罰や拒絶、否認など親の厳しい、冷たい面に関する項目が集まっているため、「厳格・拒否」と名付けた、($M=28.58, SD=7.24, \alpha=.89$)。点数が高いほど親が子供に対して「厳格で、少しの間違っても懲罰する」傾向があることを示している。第2因子、愛情、理解また過保護など親のやさしさ、暖かい面に関する項目が集まっているため、「愛情・過保護」と名付けた ($M=49.57, SD=8.75, \alpha=.85$)。点数が高いほど親の養育態度が受容的で愛情深いことを示したほか、過度な保護になる傾向も示している。逆に、点数が低いのは、親の愛情不足、冷たい、拒否的な一面も示していると考えられる。第3因子、過干渉に関する項目がマイナスに負荷して、自立性を尊重する項目は因子と正の相関が見出されたため、「過干渉-放任」と名付けた、($M=40.77, SD=5.91, \alpha=.82$)。点数が低いほど親の養育態度が過干渉的で、逆に、点数が高いほど親が子供の自立を促す傾向があるが、放任する態度も示していると考えられる。母親の養育態度尺度に対する因子分析の結果については、父親とほぼ同じの3因子解が得られた。3因子解はデータ行列の全分散の61.5%を説明していた。第1因子、「厳格・拒否」($M=25.12, SD=6.67, \alpha=.90$)。第2因子、「愛情・過保護」($M=52.24, SD=7.49, \alpha=.83$)。第3因子は父親のそれとは逆で、「過干渉」の項目は正に、「放任」の項目は負に負荷しているため、「放任-過干渉」と名付けた ($M=36.08, SD=7.57, \alpha=.83$)。各因子の項目例はTable 3に示す。

重回帰分析 まず、強迫傾向と養育態度の下位尺度間の積率相関係数を算出した。さらに、親の養育態度が強迫傾向の各側面にどのように影響しているかを検討するため、強迫傾向の各下位尺度得点を基準変数、「厳格・拒否」、「愛情・過保護」「過干渉-放任」（母親は「放任-過干渉」）の3つを説明変数として、各基準変数に対して重回帰分析を行った。多重共線性が起こることを考慮し、父親・母親の影響を別々に検討した。さらに、男

性と女性もグループ分けて分析を行った。

養育態度の各側面と強迫傾向の下位尺度との関連について、標準偏回帰係数の結果を Table 4 に示す。男性において、「強迫傾向」と「正確」、「確認」、「疑惑・制御」の3つの下位尺度と親の養育態度との間に有意な相関が見られた。具体的には以下の通りである。「強迫傾向」の総合得点では、母親の「愛情・過保護」から正の影響が見られた。「正確」得点では母親の「愛情・過保護」

Table 3 養育態度尺度各因子の項目例

父親尺度因子	母親尺度因子	項目例
厳格・拒否 ($\alpha=.89$)	厳格・拒否 ($\alpha=.90$)	17. 私が耐えられる以上に両親に処罰されている。 52. つまらないことのためでも、両親に厳しく処罰されることがある。
愛情・過保護 ($\alpha=.85$)	愛情・過保護 ($\alpha=.83$)	29. 両親によく励まされて、優れている人にならせてくれる。 15. 私が困難に向かっている時、両親に励まされ、慰められると感じる。
過干渉-放任 ($\alpha=.82$)	放任-過干渉 ($\alpha=.83$)	50. 親は私が自然のままに成長させてくれる。 12. けがをしたらと心配するので、ほかの子供ができることを両親はやらせてくれない。

Table 4 親の養育態度と強迫傾向との関連

	強迫傾向尺度					
	強迫傾向	正確	優柔不断	確認	疑惑・制御	洗浄
〈男 性〉						
父親養育態度						
厳格・拒否	.06	-.17	-.01	-.08	.36*	.11
愛情・過保護	.22	.26	.03	.28*	-.17	.23
過干渉-放任	-.03	.01	-.09	-.11	.18	-.07
母親養育態度						
厳格・拒否	.10	-.26	.09	.04	.37*	.10
愛情・過保護	.29*	.36**	.08	.23	-.03	.19
放任-過干渉	.04	.15	.04	-.03	-.02	-.04
〈女 性〉						
父親養育態度						
厳格・拒否	.13	.15	.03	.09	.15	-.02
愛情・過保護	-.03	.13	-.19*	-.04	-.08	.12
過干渉-放任	-.07	.16	-.22*	.01	-.11	-.10
母親養育態度						
厳格・拒否	.20	.18	.06	.14	.16	.11
愛情・過保護	-.02	.09	-.21*	-.01	-.10	.20*
放任-過干渉	.05	-.20	.13	.03	.13	.08

男性 N=60, 女性 N=121, 不明 N=11

注. 数値は標準偏回帰係数を表している。

** $p<.01$, * $p<.05$

から正の影響が見られた。「確認」得点では父親の「愛情・過保護」から正の影響が見られた。「疑惑・制御」得点では、父親と母親双方の「厳格・拒否」から正の影響が見られた。一方、女性において「優柔不断」「洗浄」という男性とは違う側面において、親の養育態度との間に有意な相関が見られた。具体的には、「優柔不断」得点では、父親と母親双方の「愛情・過保護」および父親の「過干渉-放任」から負の影響が見られた。「洗浄」得点では、母親の「愛情・過保護」から正の影響が見られた。単純相関と重回帰分析は、ほぼ一致した結果が得られ、同じように解釈できると考えられる。

考察

以上の結果に基づき、ここで考察を加える。なお、相関関係を検討する際に、男女別に分析を行ったが、調査対象者数（女性 121 名、男性 60 名）はあまり大きくないため、得られた結果が示した意味を解釈する時注意した。

男女差について 以上の結果より、強迫傾向と親の養育態度との関連について、男女それぞれ特徴があることが示唆された。強迫傾向において、男性と女性は全く違う面で親の養育態度の影響を受けている。Table 4 の有意な結果に注目すると、男性は「正確」、「確認」、「疑惑・制御」という 3 つの強迫傾向が養育態度と関連し、一方、女性は男性とまったく異なり、「優柔不断」、「洗浄」という 2 つの強迫傾向が養育態度と関連していることが示唆された。また、男性の「確認」強迫傾向と女性の「洗浄」強迫傾向は、男女の典型的な強迫傾向である。本研究では、このような典型的な強迫傾向はそれぞれに親の養育態度と関連しており、過保護の養育態度からより強く影響を受けていることを示唆された。家族の中で子供のことを何よりも優先し、子供の身の回りのことはほとんど親が世話をするというような「過保護」の養育態度は子供の自立を阻害し、遅らせることになると考えられる（候, 2002）。男性は、物事をする

時いつも親に頼るから、独立でやらなければならない時、失敗や脅威を恐れ、それによる不安を抑えるために「確認」行動が現われると考えられる。一方、女性は、自立性が不足すると、少しの危険に対しても無力感や恐怖感を感じ、それらによる不安感を抑えるために、儀式のように「洗浄」行動が現われると考えられる。

また、OCD の発症年齢は、男性の方が女性より低く、児童、思春期に多いのに対して、女性では成人期に多いとされている（作田, 1997）。これまでの強迫症状と親の養育態度に関する研究については、両親の影響を強く受けやすい児童や少年が対象とされてきたため、男性に関する知見がほとんどであり、女性における知見は少ないのが現状であった（吉田他, 2001）。本研究では、男性だけでなく、女性における強迫傾向と親の養育態度の関連性が示されており、その点で意義があるといえよう。また、先行研究では、養育態度尺度と強迫尺度の総合得点を用いて、両者の関係を検討する分析がほとんどであった。それに対して本研究では、それぞれの下位尺度を単位に、より詳細に検討し、上記のような男女差に関する知見が得られた。この点においても、本研究の意義が認められる。

父親の影響と母親の影響との比較 本研究では、両親の厳しい傾向の養育態度は息子の「疑惑・制御」という認知的側面に影響を与え、過保護傾向の養育態度は息子の「正確」、「確認」という行動的な側面により関連していることが示された。また、両親の感情的拒否、父親の過干渉の養育態度は娘の「優柔不断」という認知的側面に影響し、母親の過保護の養育態度は娘の「洗浄」という行動的な側面に影響していることが示唆された。OCD 患者の両親の養育態度に関する研究によると共感性の欠如、特に母親は自らの要求や期待に一致させようとする過保護・過干渉という傾向があるという点が強調され、父親においてはむしろ精神的不在性を強調されていた（市川,

1988;水野, 1989)。しかし, 本研究では, 母親だけでなく, 父親も同様に過保護, 過干渉, 厳格・拒否の養育態度が子供の強迫傾向に影響を与えていることが示唆された。このような違いが見られた理由として, 以前の研究では児童を対象に行われていたために, 母親の影響が強調されてきたと考えられる。この点については思春期以降の人を対象とした吉田(1999)の研究では, 父親も同様に支配干渉的な養育態度と強迫傾向との関連が認められている。また, 臨床場面で母親が伴って受診に行く場合が多いため, 母親の養育態度がより注目されていた可能性も考えられる(吉田, 1999)。その他, 中国では日本と違い, 子育ては母親中心ではなく, 両親が分担して取り組むため, 子供と関わる時間も両親の間で, 一般的に大きな差がない。このような文化的差異も考慮に入れる必要があるといえよう。

総合考察と今後の課題

中国における親の養育態度と強迫傾向の関連性

研究1では, 中国人健常群の強迫傾向を測定・評価する尺度を作成した。新たな尺度は十分な信頼性と妥当性を備えていることが示された。さらに, この尺度は, 病理群ではなく, 強迫傾向を持つ健常群を対象とする研究において, 活用できる尺度であることが確認された。また, 中国の現状に合わせて作成した尺度という点においても特徴的である。さらに, 多数の人に簡便に用いることができるため, 日常的にも臨床的にも強迫性のスクリーニングに活用することができる。

研究2では, 強迫傾向と親の養育態度との関連について, 下位尺度を中心に検討した。OCD患者は, 対人関係で葛藤が生じ易いとされており, 特に家族成員とのトラブルが多く, 夫婦の離婚率も他の精神疾患より高いことが指摘されている(American Psychiatric Association, 1994 高橋・大野・染矢 訳, 1996)。従って, OCDの治療では, 家族成員間, 特に母子関係や父子関係への介入は

重要なポイントとなっている(市川, 1988)。本研究は, このようなOCDの特徴とも関連した知見が得られたという点でも注目すべきものといえよう。

健常者を対象として, 強迫傾向と親の養育態度との関連性を検討した先行研究では, 親の養育態度尺度(PBI)が用いられていた。その結果, 親の過干渉(high-protection)と強迫傾向と正の相関が多くの研究で認められてきた。しかし, 本研究では, 女性において父親の「過干渉-因子」尺度が「優柔不断」と相関していることが示された以外, 過干渉と強迫傾向の間に有意な相関が得られなかった。一方, 父親と母親の「愛情・過保護」の因子と強迫傾向の下位との間にいくつかの有意な相関が認められている。これは, 本研究で使用した親の養育態度尺度が中国語版養育態度尺度(EMBU)であったため, 「過保護」と「過干渉」の独立した次元に分かれ, それぞれ「愛情・過保護」と「放任-過干渉」の下位尺度に所属していた。それによって違いが生じた可能性がある。

森田(1974)は, OCD患者は幼少期に厳格に育てられ, できないところに注目されすぎる環境を有していることが多いと述べている。本研究の結果からも, 親の「厳格・拒否」の養育態度は強迫傾向に影響しており, 特に認知的な側面「疑惑・制御」に, より強く関連していることが明らかになった。したがって, 極端に厳格な養育態度ではなく, 適度に厳格な養育態度が望ましいと思われる。一方, 「愛情・過保護」の養育態度は強迫傾向に影響しており, 特に行動的な側面「洗浄」に関連を示した。したがって, 溺愛・過保護的な養育態度ではなく, 適度な親の愛情・保護が小さい子に安心感を与え, またそのことが安定した健康な親子関係を構築することを助け, その結果子供の自立性, 社会性の成長を促していると考えられる。

また, 研究2では男女別に相関分析を行ったが, 被調査者数が小さいため, 相関の数値が少数の極

端な得点によって揺れ動きかねないと思われる。本研究で得られた男女差に関する知見は、研究の蓄積という意味で参考になるが、サンプルの偶然性を防ぐため、今後男女差に関するさらなる検討が期待される。

中国と日本を比較する必要性

中国では1970年代末から、漢民族である都市部の住民に対してのみ、一人っ子政策がとられている。本調査の対象には、農村部出身の大学生がいたことから、きょうだいがいるかどうかを明確にする必要があった。対象者209人中、この項目に明確に回答した192人のうち、一人っ子は116人(約60%)であり、半数を超える人が一人っ子であった。従って、今回の調査で得られた結果には、中国の一人っ子政策の影響があると考えられる。本研究で得られた知見から、夫婦二人で一人の子供を育てるようになったことによって、親の養育態度は二極化する可能性が想定される(状況によって、二種の養育態度を同時に持つ親もあるだろう)。1つは、一人の子供しかいないから、どのようなことでも子供中心で、あらゆるものを満足させ、できるだけ危険に近づけないように注意するといった過保護傾向の養育態度である。もう1つは、一人っ子だからこそ甘やかしてはいけないと考え、親自身の期待通りに成長させるため、子供に冷たく、厳しく、拒否的で、支配的な養育態度である。しかし、これらの養育態度はともに極端である。強迫という側面からだけでなく、より広く精神健康面までも考慮し、親の温かさと適度な厳しさという2つの子育てスタイルがうまく融合して、子供を養護・教育する必要があるであろう。

一方、日本では、核家族化傾向が急速に進むと同時に、都市化、高学歴化につれ、出生率は大幅に低下しつつある。日本の少子化問題と中国の一人っ子政策による問題は、ともに少子化に関連する問題である。こうした社会環境の中で、両国の「一人っ子」の心身の健康状況はどういうものか、

そしてそれがどのように変化していくかを検討していくべきであろう。特に、「一人っ子」の心の問題は、今後の社会構造にも影響を与えていくものと思われ、心理学的な側面から検討する意義が大きいと考えられる。日本と中国は、文化的背景や社会システムなどの面で違いが多いとはいえ、同じ東方文化圏に属し、共通点や類似点も多いと考えられる。本研究は強迫という心理現象において、中国人を対象とした調査である。しかし、今後中国における結果を、少子化問題がますます深刻になっている日本における結果と比較することによって、有益な示唆を得ることができると予想される。中国はほとんどの夫婦が共働きで、家事や育児を分担で行っている。一方、日本の子供たちは父親よりも母親からの情緒的支持を強く感じ、日本の家庭では母親が社会的統制の機能を主に担っていると指摘されている(Trommsdorff & Iwawaki, 1989)。日中の異なる環境の下で育てられた子供たち(一人っ子を含む)は、両国の社会背景の差異や文化差により、心理状況、特に強迫症状という側面にどのような違いがあるのだろうか。このような比較研究を行っていく必要があると思われる。中国と日本の比較をすることで、結果的に文化差を排した強迫症状のより中核的な部分についての検討や介入も可能になる。本研究は、このような比較研究の土台として非常に意義があると考えられる。

今後の課題

本研究は一時点での調査であり、本研究の結果から「親の養育態度が強迫傾向に影響している」という因果関係を決めつけることはできない。また、養育態度のどの要素を増やすことによって強迫傾向が軽減するかという問題については、横断的研究からのみでは判断できない。したがって、今後は縦断的研究による検討が必要となるであろう。また、今回の分析結果によって、強迫傾向と親の養育態度との関係が男女によって異なることが示唆された。しかし、この男女の違いが現われ

てくるのはなぜだろうか。この点については、父親と母親の機能や役割の違いを吟味することが必要と考えられる。また男性にとっての父親（母親）は女性にとっての父親（母親）とそれぞれ異なった意味をもっていると考えられる。今後は、文化差も考慮して、性差について詳しく検討していく必要があるといえる。

また、本研究の結果標準偏回帰係数はあまり大きくなかった。この点に関連しては、被調査者が親の養育態度を正確に想起できたかどうか、また他の第3要因が影響している可能性、測定誤差によって相関が薄められている可能性などが考えられる。中でも興味深いのは養育態度と強迫傾向の間に第3要因が作用している可能性である。この点に関しては、OCDの認知行動理論の中で非常に重要視されている「強迫的信念」を取り上げ、養育態度→強迫的信念→強迫傾向という媒介モデルを検討することを今後の課題としたい。

引用文献

- American Psychiatric Association (1994). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*, 4th ed. Washington, DC: American Psychiatric Association.
- (アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸 (訳) (1996). DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院).
- Ferrari, J. R., & McCown, W. (1994). Procrastination tendencies among obsessive-compulsives and their relatives. *Journal of Clinical Psychology*, **50**, 162-167.
- Goodman, W. K. (1989). The Yale-Brown Obsessive Compulsive Scale I: Development, use, and reliability. *Arch Gen Psychiatry*, **46**, 1006-1011.
- Hafner, R. J. (1988). Obsessive-compulsive disorder: A questionnaire survey of a self-help group. *International Journal of Social Psychiatry*, **34**, 310-315.
- Hodgson, R. J., & Rachman, S. (1977). Obsessional-compulsive. *Behaviour Research and Therapy*, **15**, 389-395.
- 候 桂芳 (2002). 中国における一人っ子青年の性格特性と認知された親の養育態度 性格心理学研究, **10**(2), 85-97.
- 市川光洋 (1988). 児童期の強迫神経症——強迫症状の背景と家族療法—— 児童青年精神医学とその近接領域, **29**(3), 148-159.
- 井出正明・細羽竜也 (1995). 強迫傾向尺度構成の試み 広島大学総合科学部紀要IV理系編, **21**, 171-182.
- 岩脇三良 (1994). 異文化間研究の方法論に関する考察 社会心理学研究, **10**(3), 180-189.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 中央公論社
- 松永寿人 (2002). 強迫神経症からOCDへ こころの医学, **7**, 10-14.
- 水野和子 (1989). 児童期における強迫神経症について——5例の自験例を通して—— 児童青年精神医学とその近接領域, **30**, 165-180.
- 森田正馬 (1974). 森田正馬全集第2巻 神経衰弱と強迫観念の根治法 白揚社
- 成田善弘 (1982). 女性の強迫神経症について 臨床精神病理, **3**, 53-64.
- 成田善弘 (1994). 強迫症の臨床研究 金剛出版
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, **52**, 1-10.
- Perris, C., Jacobsson, L., Lindstroem, H., von Knorring, L., & Perris, H. (1980). Development of a new inventory for assessing memories of parental rearing behaviour. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, **61**, 265-274.
- Rachman, S., & de Silva, P. (1978). Abnormal and normal obsessions. *Behaviour Research and Therapy*, **16**, 233-248.
- Reed, G. F. (1976). Indecisiveness in obsessional-compulsive disorder. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **15**, 443-445.
- 作田 勉 (1997). 強迫性障害 B. 疫学・予後 松下正明 (編) 臨床精神医学講座第5巻 神経症性障害・ストレス関連障害 中山書店 pp. 306-316.
- Salkovskis, P. M., & Harrison, J. (1984). Abnormal and normal obsessions: A replication. *Behaviour Research and Therapy*, **22**, 549-552.
- Salzman, L. (1973). *The obsessive personality: Origins, dynamics and therapy*. New York: Jason Aronson.
- Sanavio, E. (1988). Obsessions and compulsions: The Padua Inventory. *Behaviour Research and Therapy*, **26**, 169-177.
- 新保敦子 (1992). 中国における一人っ子政策と家族の家庭的機能の変容 早稲田大学教育学部学術研究 (教育・社会教育・体育学編), **41**, 1-10.
- 塩原順子 (1992). 幼児期から発症した強迫性障害の臨床像について 児童青年精神医学とその近接領域, **33**, 275-291.

白波瀬一郎・藤澤大介 (2002). OCD の心理的成因仮説
 ころの科学, **7**, 19-22.

舒 良 (1999). 自评抑郁量表和抑郁状态问卷 (自己評
 備式抑うつ性尺度及び抑うつ状態尺度) 中国心理卫
 生杂志 北京: 中国心理卫生杂志社 pp. 194-197.

Shweder, R. A. (1991). *Cultural psychology: Thinking
 through cultures*. Boston, MA: Harvard University Press.

丹野義彦 (1998). エビデンス臨床心理学——認知行動
 理論の最前線—— 金子書房 pp. 93-108.

Trommsdorff, G., & Iwawaki, S. (1989). Students' percep-
 tions of socialization and gender role in Japan and Ger-
 many. *International Journal of Behavioral Develop-*
ment, **12**, 485-493.

辻 悟・小林良成・清水将之・坂本昭三 (1966). 強迫
 症状を主症状とする境界線症例と強迫神経症の異同
 (主に TAT を中心として) 精神分析研究, **12**, 21-28.

Vogel, P. A., Stiles, T. C., & Nordahl, H. M. (1997). Recol-

lections of parent-child relationships in OCD out-pa-
 tients compared to depressed out-patients and healthy
 controls. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, **96**, 469-474.

吉田卓史 (1999). 強迫性障害の PBI 精神科診断学,
10, 409-416.

吉田卓史・多賀千明・福居顕二 (2001). 強迫性障害患
 者における両親の養育態度の男女差—— Parental
 Bonding Instrument (PBI) を用いた研究—— 精神医
 学, **43**(9), 951-956.

岳 冬梅 (1999). 父母养育方式评价量表 (親の養育態
 度評価尺度) (EMBU) 中国心理卫生杂志 北京: 中国
 心理卫生杂志社 pp. 161-167.

郑 晓华・舒 良・赵 吉凤 (1993). 状态-特质焦虑
 问卷在长春的测试报告 (状態・特性不安尺度の長春
 市での実施報告), **7**(2), 60-62.

— 2007.3.20 受稿, 2008.1.1 受理—

補足資料 1 強迫傾向尺度の因子分析結果 (プロマックス回転後)

No.	項目内容	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5
1. 確認						
48.	ガスの元栓や水道の蛇口をしめたと、照明を消したと分かっているが、 2 回以上チェックする。	.704				
47.	お金を引き出す時、確実に通帳、カードとお金を持っているかどうかを 2 回 以上チェックしないと気がすまない。	.690				
53.	何かしたときには、必ず 2 回以上チェックする。	.626				
36.	ドアや窓を引き出しが確実にきちんと閉まっているかどうかを確認するために 家に引き返す。	.533				
31.	試験の時、自分の名前をちゃんと書いてあるかどうかを 2 回以上チェックしな ければならない。	.524				
46.	何か物をなくしたのではないかと、忘れ物をしたのではないかとよく疑う。	.504				
56.	ポストに入れる前に、手紙を 2 回以上チェックする。	.480				
12.	理由もなく、ある決まった回数を繰り返さなくてはいけないと感じる時がある。	.448				
21.	お金を払う時、払う金額が正しいかどうかを 2 回以上チェックする。	.420				
2.	きちんとやれたと思うまでに、物事を何度か繰り返さなくてはいけない。	.408				
15.	書類や小切手などを確実に正しく記入したかどうか、細部にわたって 2 回以上 チェックする。	.396				
19.	何かを注意深くやった後でも、まずいやり方をしたとか、完了していないので はないかを感じる。	.347				
18.	あることが起こる可能性がないと分かっているが、何か起こるのを心配する。	.300				
16.	実際にはやったと分かっていることを、本当にやったかどうか確信できない ことがある。	.289				
59.	周りの人が直りにくい病気にかかったら、伝染病ではなくても、自分もか かったのではないかと心配する時がある。	.265				
2. 優柔不断						
4.	何かを決定するような状況におかれるのは嫌いだ。	.852				
5.	小さいことでも、決心するのは難しいと感じるときがある。	.681				

補足資料1 (つづき)

No.	項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
20.	物事を決めるのが遅い。		.675			
13.	どのようにしても結果があまり変わらないことであっても、なかなか決められない時がある。		.522			
42.	レストランで注文する時、あるいは買い物する時なかなか決められない。		.495			
22.	自分が何を望んでいるかは、いつもはっきりとわかっていない。		.454			
32.	一度決めた事は、後になって悩んだりする。		.449			
29.	最も重要なことを優先させることができなくて、仕事が長引いてしまう。		.425			
55.	つまらない事を決めるのにも、たくさんの時間を使っていると思う。		.398			
28.	自分がするほとんどのことに不審や疑問を抱いてしまう。		.377			
40.	悪いニュースを聞くと、どうもそれが自分のせいではないかと考える時がある。		.300			
58.	もういらないものでも、将来使うかもしれないと思い、捨てられない。		.207			
3. 正 確						
57.	本棚にある本がきれいに並んでいないと気がすまない。		.770			
7.	テーブルの上に置いた物を全部きれいに片付けないと気がすまない。		.751			
1.	目に見えた物がきれいに片付けているかどうか気がなる。		.734			
37.	自分の物や部屋をきれいに片付けないと気がすまない。		.717			
9.	寝る前、決まった順序で服をかけたり、畳んだりしないと気がすまない。		.666			
38.	寝る前に、あることを決まった順序でしなければならない。		.624			
25.	服を着たり、腕いだり、体を洗うときに、決まった順序に従わなければならないと感じる時がある。		.518			
54.	試験の時、自分が持ち込んだペンなどの文房具をきれいに並べておかないと、安心して問題をとくことができない。		.379			
4. 疑惑・制御						
51.	意味がない音、言葉、音楽が意に反して、頭に浮かんで来る時がある。		.630			
35.	理由もなく、物を壊したい衝動を感じる時がある。		.595			
34.	私の頭脳は勝手に動いている時があり、周囲で起きていることに注意を払うのが難しい。		.525			
52.	不愉快な考えが心に浮かんで来て、わずらわされているような気がする時がある。		.484			
60.	将来の進路を考え始めると、ずっと考えてしまい、なかなかやめることができない。		.445			
50.	何かを考えたくない時、コントロールすればするほど、コントロールできないと感じた時がある。		.444			
30.	自分の意に反することをしたのではないかと考える時がある。		.413			
33.	不快な考えが頭に浮かんで来て、それらを取り除くことができない時がある。		.370			
41.	自分のうっかりや、小さなミスのために破局的な結果が生じるのではないかと考える時がある。		.353			
3.	時計の音やほかの小さい音が気になる時がある。		.330			
39.	知らないうちに誰かを傷つけたのではないかと考える時がある。		.322			
26.	理由もなく他人と喧嘩したい時がある。		.270			
45.	本を読みながら、重要なことを見落としたのではないかと、何度か読みなおさないとられないと感じる時がある。		.225			
5. 洗 浄						
23.	汚いと思う物を触ったら、着ている服まですぐに洗わないと気がすまない時がある。		.649			
27.	汗や唾や小便などに少しでも触ると、服が汚れたとか、私にとって何らかの害になるだろうと思う。		.628			
44.	公衆電話は誰でも使えて、病気がうつるのが怖いので、できるだけ使わないようにしている。		.603			

補足資料 1 (つづき)

No.	項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
17.	病気がうつるのが怖いので、できるだけ公衆トイレを使わないようにしている。					.555
24.	動物は汚いと思っていて、触ったら手を洗ったり、着替えたりしないと気がすまない。					.447
6.	お金に触ると、手が汚れたと感じて、早く洗わないと気がすまない。					.431
8.	汚いと思う物や人をできるだけ触らないようにしたり、離れるようにしたりする。					.413
14.	汚れている物を触った、あるいは触ったと思う時にすぐ手を洗わないと気がすまない。					.408
49.	自分をきれいに保つため、毎日やや長い時間をかけて体を洗う。					.373
43.	ある特定の人が触ったと分かっている物には触りたくないと感じる。					.343
10.	手を洗う時、2回以上洗わないと気がすまない。					.332
11.	ばい菌が気になる、また自分は何かの病気にかかったのではないかと心配する時がある。					.252

注 1. 元の尺度は中国語版、ここに載せたのはそれを翻訳したものである。

注 2. 網かけの項目は短縮版(49項目)の尺度に入っていない。

Obsessive-Compulsive Tendency and Parental Rearing Styles of Chinese University Students

Xiaoru LI and Haruhiko SHIMOYAMA

Graduate School of Education, The University of Tokyo

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2008, Vol. 16, No. 3, 335-349

Obsessive-compulsive disorder consists of two major symptoms: obsession and compulsion. However, similar types of thoughts and behaviors are also found among non-clinical population, which are called obsessive-compulsive tendency (OCT). The purpose of the present study was to examine the relationship between OCT of respondents and rearing styles of their parents. In Study 1, a questionnaire was administered to 230 students in Chinese universities. Obsessive-Compulsive Tendency Scale of five subscales was developed, which had high reliability and validity. In Study 2, relationship between OCT and parental rearing styles was examined. Multiple regression analyses revealed that parental rearing styles significantly predicted three subscales of OCT among men: endless rechecking, rightness, and doubt, and the other two subscales among women: washing compulsion and indecision.

Key words: obsessive-compulsive tendency, parental rearing styles, Obsessive-Compulsive Tendency Scale, Chinese students